

北島准后親房公撰

評註
校正
神皇正統記
全六册

同盟書賈梓



當時關東八少皆歸一足利氏
其屬王室者不過五城而或潛通
其職或觀望伺時變獨親房擁區
區之衆內有兵困糧竭之憂分無
蚍蜉蟻子之援相持九月乞援結
城親朝親朝貳于尊氏終不赴救
乃棄城歸去野輔相幼主揮德強

一。故。此。為。南。朝。元。老。先。賢。稱。為。有
諸。葛。亮。之。風。豈。不。稱。哉。予。讀。其
所。著。神。皇。正。統。記。有。深。感。焉。昔。漢
班。彪。作。玉。牟。論。以。諷。隗。囂。使。知。漢
祚。之。復。興。習。鑿。齒。作。漢。晉。春。秋。以
規。桓。溫。使。知。神。器。之。不。可。觀。其。用
心。亦。忠。矣。親。房。此。書。憤。叛。賊。憂。王。室。

揭。皇。統。亦。既。微。明。神。器。之。有。歸。
仗。亂。臣。賊。子。知。正。統。決。不。可。紊。天。威
決。不。可。犯。其。維。持。萬。世。綱。常。非
班。彪。鑿。齒。所。髣。髴。先。賢。以。為。得
春。秋。遺。意。亦。非。過。稱。也。嗚。呼。予。若
親。房。謂。之。文。武。良。相。孰。為。不。然
耶。

古安積信之論。議論正大。義理
精明。當辨此書。而莫愧焉。即
錄以代序云。時慶應元年。其
四月中浣也。

平安處士舉蘇園河真一拜書



評註校訂神皇正統記卷之一目錄

天神七代

國常立尊

國狹槌尊

豐斟淳尊

泥土煮尊

沙土煮尊

大戸道尊

大苦邊尊

面足尊

惶根尊

伊奘諾尊

伊奘册尊

地神五代

天照大神

忍穗耳尊

瓊瓊杵尊

彦火火出見尊

鸕鷀草葺不合尊

評註校訂神皇正統記卷之一

神代之段

准后源親房公撰

回天詩史曰其
日鈔日記其
家乘日録汗牛
充棟而巍然如
山嶽者莫神皇
正統記若焉
日本紀曰天神
謂伊奘諾伊奘
册尊曰有豐原
原千五百秋瑞
穗之地宜汝往
循之迺賜天瓊
文
全書曰天照大
神教皇孫曰芦
原千五百秋之
瑞穗國是吾子
孫可王之地也

大日本ハ神國ナリ天祖トドめて基をひくき日神オガク
紗を傳へ給ふ我國のみ此事あり異朝ふ其たぐひあり
此ゆゑハ神國といふをより神代ハ豊葦原の千五百秋の
瑞穗國といふ天地開闢のけづめより此名有り天祖國常
立尊陽神陰神ハづけ給ひて救ふ聞えり天照大神天
孫尊ふゆばりまじりて此名ハ根本の号ありと々
知ぬを又ハ大八洲國といふ是ハ陽神陰神此國を生
給ひてハの島をよりて名はなられふに又
ハ耶麻止ヤハこれハ大八洲の中津國の名あり第八ハ
あゝるたび天御虚空豊秋津根別といふ神を生給ひて是

後漢書曰倭在
韓東南大海中
依山島為居九
百餘國自武帝
滅朝鮮使馭通
於漢者三十許
國國皆稱王世
世傳統其大倭
王居邪馬臺國

を大日本豊秋津洲と名づく今ハ四十八箇國ふこりてり
中州たりし上ハ神武天皇東征より代々の皇都ありしは
てその名をとりて餘の七州をもまべく耶麻土といふ
るべしとらんこゝある周の國より出たりしを天の下を
周といひ漢の地よりたどりたまは海内を漢と名づく
がとおし耶麻土といふることハ山迹といふありむく
天地こつれて泥のうらわひいまだ乾うば山成のみ往來
してその跡おわたりはまば山迹といふはるひハ古語
居住を止せりハ山ハ居住せしよりて山止まりともい
はる大日本とも大倭とも書ことハ此國漢字傳く後國の
名をかこふ字をば大日本や定めて志すも耶麻土と讀せ
たるあり大日靈の御國なればその義をもとれりま

隋書曰日出所
天子致書日没
所天子無恙

萬葉集詠不盡
山歌曰日本之
山跡國乃鎮十
カ

日の出るところふちりなれば然いなる義ハこれをれど
字のまゝふ日のもとのハ讀ば耶麻土や訓ぜり我國の漢
字を訓むることなかくかくのごとしハおのづかづ日のも
やれといふるハ文字ふよれるあり國の名とせらふあり
まま古へより大日本とも若ハ大の字は加へば日本と
も書し州の名ハ大日本豊秋津といふ懿徳孝靈孝元等の
御謚皆大日本の字なり垂仁天皇の御女大日本姫といふ
これ皆大の字あり天神饒速日尊天の磐船ハの里大虚と
りけりて虚空見日本の國と宜ふ神武の御名神日本磐余
彦と号し奉る孝安代日本足開化を稚日本とも号し景行
天皇の御子小碓皇子を日本武尊と名付奉るこれハ大を
加へばるありこれとて同くやましく讀せたとど大日

靈の義をとらばおちやましく訓てもうあふなきりその
 後漢土より字書を傳りる時倭といひて此國の名を用ひ
 たるを即領納してまゝ其の字を耶麻土や訓して日本の
 ことくふ大を加へても又除きても同ト訓は通用しり
 漢土より倭と名付たることひむろく此國の人をトめて
 彼土ふいたりしふ汝が國の名ないかゞいふと問らるは
 我國やましく云を聞てまればち倭と名付たりと見ゆ漢
 書は樂浪の彼土の東北に海中に倭人あり百餘國を分て
 一書ふは秦の代よりまてふ
 通べとも見ゆ 後漢書に大倭主に耶麻堆ふ居れと見え
 下記に 耶麻堆のや これの君をてふ此國の使人本國の例ふよ
 り大倭と稱するふよをかく記せるか 神功皇后の新羅百
 濟高麗をまらるが

隋史曰皇帝問
 倭皇使人長吏
 大禮蘇因高等
 至具懷朕欽兼
 室命臨御區宇
 恩弘德化覃被
 會靈愛育之情
 無隔遐迹知皇
 介居海表撫寧
 民庶境內安樂
 風俗融和深氣
 至誠也

給ひしが後漢の末さきなりしと見ゆ漢地にも通ぜられた
 りと見えしは文字もさきよめて傳りる一説ふは秦の
 時より書籍を大倭といふ事ハ異朝も領納して書傳ふ
 傳ふともいふのせたまは此國のみほめて稱するふあは
 といふハ大ありと 唐書に高宗咸亨年中に倭國の使をト
 講するころあり めてあはためて日本と号に其國東にあり日の出るをこ
 ろちろきをいふや載たり此あや我國の古記にいたるか
 あは推古天皇の御時ころの隋朝より使ありて書
 をたくりし倭皇とかく聖德太子みだう筆をとり
 て返牒を書たまひし東天皇敬白西皇帝と有りま彼
 國よりハ倭と書たまは返牒ふハ日本や倭ともせ
 ばこれより上代ふハ牒ありとも見えざるあり唐の咸
 亨のあらハ天智の御代ふありたまはとふ中ころ

神武紀曰三十有一年夏四月乙酉朔皇輿巡幸因登腋上嚙間丘而廻望國狀曰姪哉乎國之獲矣雖內木綿之真迹因猶如蜻蛉之醫帖焉由是始有秋津洲之号也又曰昔伊奘諾尊見此國曰本者浦安國也千足國磯輪上秀真國復大已貴大神月之曰玉牆內國

回天詩史曰正統記作明國体州龜鑑而不能無倭佛之累嗚呼卓識如准后猶尚如此邪說之感世習俗之移人可畏哉

より日本と書ておくらねたるふやまこ此國をハ秋津洲やいふ神武天皇國の形をめぐら望み給ひて蜻蛉の殿目咕がごせくつらふと宣ひより此名ありとそ然さど神代ハ豊秋津根といふ名あれハ神武ハなぐめはるふや此外もハまな名あり細戈千足國とも磯輪上秀真國とも玉垣内國ともいなりまこ扶桑國といふもなるが東海の中ハ扶桑の木なり日の出るやと見たり日本も東よあまばよそくてのなるか此國ハ木なりといふこやまよふ之ねばたうなる名ハあまばるべハ凡内典の説ハ須弥といふ山ありこの山を廻りて七の金山なり其中間ハみれ香水海あり金山の外ハ四大海なりこの海中ハ四大洲あり洲とやみまこ二はの中洲あり南洲をハ

膽部といふハ閩浮提といふ同 色のハ樹の名あり南洲の中心ハ阿耨達といふ山なり山の頂ハ池あり阿耨達ハ熱といふ外書ハ崑崙と池のかさささみ此樹ハをめぐりいへるハ即此山あり 七由旬高さ百由旬あり 一由旬といハ四十里あり六尺を一歩といハ三百六十歩を一里といハ此里をめぐりて由 此樹州の中心ハなりて尤高ハ依て州の名やハ阿耨達山の南ハ大雪山北ハ葱嶺あり葱嶺の北ハ胡國雪山の南ハ五天竺東北ハよりてハ震旦國西北ハあまこしてハ波斯國あり此膽部州ハ縱横七千由旬里をもちて計ふれば二十八萬里東海より西海ふいたるまご九萬里南海より北海ふいたるまご九萬里天竺ハ正中ハよまよりよりハ膽部の中國といハ地のめぐりまご九萬里震旦ハひろくやのたごも五天ハあまこハ一邊の小國なり日

本^元の土^元を^元れ^元て海中^元あり南部^元の護命^元僧正^元北嶺^元
 の傳教^元大師^元の中州^元ありとあるされたり志^元う^元ば南州^元を
 東州^元との中^元ある遮摩羅^元を云州^元あるべきふや華嚴^元經^元不^元東
 北^元の海中^元ふ山^元なり金剛^元山^元といふや^元ら^元の^元今^元の大倭^元の金
 剛^元山の事^元ありとぞされば此國^元の天竺^元よりも震且^元よりも
 東北^元北^元大海^元の中^元ふなり別州^元よりて神明^元の皇統^元を^元は^元へ
 たま^元る國^元ありとあり世界^元の事^元ある^元天地^元開闢^元の^元事^元
 め^元い^元は^元く^元も^元う^元も^元る^元な^元ま^元あ^元る^元ね^元ど^元三國^元の^元説^元お^元の^元く^元異^元か
 り^元天竺^元の^元説^元ふ^元の^元世^元の^元も^元ど^元まり^元を^元劫^元初^元とい^元ふ^元
劫^元初^元とい^元ふ^元空^元の^元四^元なり
名^元共^元の^元増^元減^元あり^元一^元増^元一^元減^元を^元一^元小^元劫^元とい^元ふ^元二十^元の^元光^元帝^元と
増^元減^元を^元一^元中^元劫^元とい^元ふ^元四十^元を^元あ^元と^元せ^元て^元一^元大^元劫^元とい^元ふ^元光^元帝^元と
い^元ふ^元天^元衆^元空^元中^元の^元金^元色^元の^元雲^元を^元た^元あ^元り^元梵^元天^元ふ^元遍^元布^元は^元を^元形^元を^元
ち^元大^元雨^元を^元あ^元り^元風^元輪^元の^元上^元ふ^元は^元り^元り^元て^元水^元輪^元と^元ある^元増^元長^元い

て天上^元ふ^元いた^元ま^元り^元ま^元る^元大風^元なり^元て^元沫^元を^元吹^元た^元て^元空^元中^元ふ
 あ^元ら^元お^元く^元ま^元れ^元た^元ら^元大梵^元天^元の^元宮^元殿^元と^元ある^元その^元水^元次^元第^元に^元退^元
 下^元り^元て^元欲^元界^元の^元諸^元宮^元殿^元ふ^元り^元て^元須^元弥^元山^元四^元大^元州^元鐵^元圍^元山^元を^元成^元
 ま^元か^元く^元て^元萬^元億^元の^元世^元界^元同^元時^元ふ^元なる^元これ^元を^元成^元劫^元とい^元ふ^元
此^元萬^元億^元の^元世^元界^元を^元三^元千^元大^元
千^元世^元界^元と^元い^元ふ^元光^元帝^元の^元天^元衆^元下^元生^元り^元て^元次^元第^元ふ^元住^元ま^元これ^元を^元住^元
劫^元とい^元ふ^元この^元住^元劫^元の^元間^元ふ^元二十^元の^元増^元減^元ある^元へ^元と^元ぞ^元れ^元の^元
も^元ど^元め^元ふ^元人^元の^元身^元光^元明^元遠^元く^元照^元り^元て^元飛^元行^元自^元在^元あり^元歡^元喜^元を^元
も^元り^元て^元合^元と^元は^元男^元女^元の^元相^元あ^元り^元後^元ふ^元地^元より^元甘^元泉^元涌^元出^元味^元酥^元蜜^元
の^元あ^元ら^元味^元と^元も^元り^元地^元これ^元を^元あ^元り^元味^元着^元を^元生^元じ^元り^元て^元神^元
通^元を^元う^元ら^元ひ^元光^元明^元も^元消^元て^元世^元間^元大^元ふ^元く^元く^元あり^元ぬ^元衆^元生^元の^元
報^元ひ^元あ^元ら^元ら^元り^元め^元り^元ぬ^元黒^元風^元海^元を^元吹^元て^元日^元月^元二^元輪^元を^元漂^元出^元ま^元
須^元弥^元の^元半^元腹^元ふ^元あ^元ま^元き^元く^元四^元天^元下^元を^元て^元く^元は^元り^元む^元これ^元より^元なり^元

めく晝夜晦朔春秋有り地味おあけまより顔色うけ
 おとろふべき地味まうせく林藤まうせて自然の税稻あり
 いふ衆生まう食とに林藤まうせて自然の税稻あり
 ろくの美味をそれへたり朝おうせいゆかどふ熟に稻を
 食せしむるを身不殘穢出来ぬこのゆゑおはせしめく二道
 有り男女の相各別ありてはあふ嬌欲のまはるを夫婦
 や名づけ舎宅をふまへてともま住ま光帝の諸天後お下
 生まらぬの女人の胎中おいらりて胎生の衆生とらるその
 のち税稻生せぬ衆生うねあげきておのく境をまらち
 田種をほどこし植て食とに他人の田種をはへ奪ひぬに
 むらの出来てたがひおうちあふそふこれを決まる人あ
 りりいふ衆ともおまをうひて一人の平等王を立名は

けて刹帝刹りゆか田主とりゆかそのをいめの王を民主王
 や号しき十善の正法をおこまひく國を治めりあは人民
 これを敬愛を閻浮提の天下豊樂安穩ありて病患ねらひ
 大寒熱あることあし壽命も極めて久く無量歳ありき民
 主の子孫相續て久く君たりしが漸く正法もねらるへ
 壽命も減じて八萬四千歳おいたる身の長八丈お
 まその間小王ありて轉輪の果報を具足せり先天より金
 輪寶飛降はく王の前お現在に王出たまふあとおれは此
 輪轉して行くものくの小王みお迎へて拜はあて違
 ふものあり即ち四大州お主たりま象馬珠玉女居士主
 兵等の寶有り此七寶成就するを金輪王と名づく次々お
 銀銅鐵の轉輪王有り福力の不同およりて果報も次第に

ねとるあり壽量も百年ふ一年減り身のためもおろ
 く一尺を減じてはり百二十歳ふあたより時釋迦佛出
 たまふ或ハ百歳の時ともいふこゝに十歳ふいたらんころ
 あひふ三災といふあとのあるべし人種あつくおほきて
 唯一萬人をおまけその人善をおこれひくまゝ壽命も増
 果報もまきみく二萬歳ふいたらん時鐵輪王出て南一
 州を領まべし四萬歳の時銅輪王いでく東南二州を領に
 六萬歳の時銀輪王いでく東西南三州を領し八萬四千歳
 の時金輪王いでく四天下を統領はるその報ひ上おほなる
 がこころあの時まゝ減むらひて弥勒佛いきたまふ
 八万歳の時この後十八箇の減増あるべしかくて大火
 災といふこゝをおこりて色界のまじり禪梵天まで焼ぬ三
 十大千世界同時お減むるこれを壊劫といふかくて世界

虚空黒雲のこぞくあるを空劫といふかくのごぞくま
 るあとし箇の大劫を経て大水災たり此たびハ第二禪まで
 壊れ七々の火災七々の水災を経て大風災ありて第三禪
 まで壊れこれを大の三災といふなり第四禪以上お内
 外の過患なるこぞあり此四禪の中お五天たり四ハ凡夫
 の住所一ハ淨居天として證果の聖者の住所あり此淨居天
 まで摩醯首羅天王の宮殿たり大自在天色界の最頂お
 居して大千世界を統領はるその天のひろさらの世界おと
 たより下天も廣狭も不同あり初禪の此上お無色界の天
 たりまゝ四地をとりてりといなりこれらの天ハ小天の
 災お逢はせりなり業力も際限あつて報ひ盡おは退没

さへ見えて震且の事と云ふ書契を事と爲る國がさ
が在界建立をのりたることなすは儒書に伏犧氏
といふ王よりあはれをいひて但異書の説に渾沌未分
のち天地人のちをいひて神代のおこり相
似たり或いませ盤古といふ王有りて日月やあり毛
髪は草木やあるといふることをありそれより下はこ
天皇地皇人皇五龍等のちのちの氏打續きてわくの
王ありその間數萬歳を経たりといふ我朝のちのち天
神の種をうけて世界に建立するをかたいた竺の説に似
たる方もあるよやさきどもこれの天祖よりこのかたの
躰たがをばして唯一種のみまゝに天竺のみもそのた
がひあゝかの國をいひての民主王も衆のため撰び立

られしより相續せりまゝに世くたりてはその種姓もたや
くあはれはさして勢力はさして下劣の種も國主とありたま
さへ五天竺は統領するやうにもありと震且まゝにさ
ら見だりしより一國ありむろし世をたをふ道たがが
まゝに賢をえりて授くる跡有りしに上を一種姓
さだむるあやあり乱世もあるまゝにちをいひて國を
あはれさうして民間よりいひてくくろみ居たるも
里戎狄よりたあるを國をうけるもたり或は累世の臣
やしてその君臣志のちを譲りを得たるもたり伏犧
氏の後天子の氏姓を替たることをいひて三十六乱のち
をいひてさいふたがげのちをいひて唯我國のみ天地ひ
り初めより今の今日おいたるまゝに日嗣を授たまふ事

関城書曰我國者天祖經始之地日神紘領之州也聖々相兼受不感且依禪讓且飯正理所經九十余代一百七十余万歳也縱難及未世不可有違越日神誓約可暨無究故也

神代紀曰古天地未剖陰陽不

其清陽者薄靡而為天重濁者淹滯而為地精妙之合搏易重濁之凝場難故天先成而地後定然後神聖生其中焉故曰開關之初洲壤浮漂譬猶游魚之浮水也于時天地之中生人物狀如葦牙便化為神号國常立尊

とこしとあふべ一種姓の中におおきてもれのぼく傍よ
まはさへたまひしと猶正お道りてぞたもちまきりく
りるこれまきりまぐく神明の御誓ひつたおく餘國
おこやあるをさいとれありそめく神道のこそをたや
まぐ顯をほむといかこやあど根元を知らざれいみだ
まがをく端ともありぬぐくそのはいへをまぐまんた
めいほくを勒侍り神代より正理ふて受傳へるいをも
を宣んことをまきりて常おまことゆることへのせんま
まの神皇正統記とや名ぼれをへはぼれま夫天地いまご分
まげり一時渾沌やして圓まることを雞子のごとくくも
きて牙をあくめりさこれ陰陽の元初未分の一氣あり
その氣をくめてくろねく清く明らるありいたおびさて

天とれりおもく濁するははぐりく地やあるその中お一
物あれを出たるうたち葦芽のごとく即化して神とあり
わ國常立尊と申れまとい天御中主の神とも号し奉る此
神お水火木金土の五行の徳まきんまぐ水徳の神お何
らいまたまふを國狹捷尊といか次お火徳の神を豊斟淳
尊といか天の道ひとりあゆゆお純男あてまきん純男
といへどもその相お次お木徳の神を渥土煮尊沙土煮尊
まといか次お金徳の神を大戸之道尊大苦邊之尊といか法
まお土徳の神を面足尊惶根の尊をいか天地の道相ま
たりておのく陰陽のうたちあり然まどもその振まひ
まといたりこの諸神實お國常立の一神おまきん
あるべし五行の徳おのく神とあをられたまふこれを

丹後風上記曰

與謝郡々家壯隅方有速石里此里之海有長大石長二千二百廿九丈廣或九丈以下或所十丈廿丈以下先名梯立後名久志濱然云者國生大神伊射奈藝命天為通行而梯作立故云天梯立神御寐間伏云云

私記曰自凝之島也猶如言自凝也又曰今見在淡路島西南角小嶋是也
垂仁紀曰時天照大神誨倭姬命曰是神風伊勢國則常世之浪重浪歸國也傍國可憐國也欲居是國故隨大神教其祠立於伊勢國與齋宮十五鈴川上是謂磯宮

六代ともうごあるあり二世三世の次第立登るふへに
らげらふや次ふ化生下たすへる神を伊弉諾尊伊弉册尊
や申後これいまはくく陰陽の二はふりれく造化の元
とれりたまふ上の五行の猶ひとつくの徳ありこの五
徳をあてせく萬物を生むるを定めとれこへ天祖國常
立尊伊弉諾伊弉册の二神ふ教りて宣うく豊葦原の千
五百秋の瑞穂の地有り汝往く去るべしとて即天の瓊
矛授けたまふ此矛天の魔返也ともいなり 二神此矛授さ
はうりて天の浮橋の上におたくむみく矛をはり下りてか
きはぐりたまひしうへに滄海のくあまきその矛のさねよ
り滴りおつる潮らりて一の島とあるこれを磯馭盧嶋と
いふ此名おはきて秘説らり神代梵語おがよなるうその

所もあまきうふある人あり大日本の國靈山ありといふ
口傳二神此島ふ降居て即國の中純柱をたぐ八尋の殿を
化作てやもふ住たまふはて陰陽和合して夫婦の道有り
此矛の傳へて天孫あまきうへにありたりたまへりやも
いふまゝ垂仁天皇の御宇ふ大倭姫の皇女天照大神の御
教へのまゝふ國々をめぐり伊勢の國ふ宮所をもとめ
まひ一時大田命といふ神まのてあひて五十鈴の河上ふ
寶物をまはりありるところを志めり申しふかの天逆
矛五十の金鈴天宮の圖形有りま大倭姫命よりいびく其
やころをはげめく神宮をたぐるる寶物の五十鈴の宮の
酒殿ふをさめられしやもいふまゝ滝祭りの神を申はて
竜神ありその神あはれしやも地中ふをはめたりやもいふ

古語拾遺曰天照大神高皇產靈尊乃相語曰夫葦原瑞穗國者吾子孫可生之地云云即八咫鏡及薙草劍二種神寶授賜皇孫永為天孫牙玉自從即敕曰吾兒視此寶鏡常猶視吾與同床共殿以為齋鏡

一乃大倭神龍田神のあめ滝祭と同体ふまはるの神のあざりたまはるふよりて天柱國柱といふ御名ありともいもんう一礮馭盧嶋小持くらをたまひしこやいあきららあり世に傳ふといふこといおぼつうなり天孫の志たが屋たまふをくむ神代より三種の神器のこぞく傳へるまふをくはしとあきて五十鈴の河上ふあまらんもおぼつうあ但天孫も牙や玉とみだりうとくく人たまふやいふこと見えたり古語拾遺の説あり然とど牙も大汝の神のたてまつらり玉をたのりし牙もわれをいづとといふことを知りたし靈山ふやよりて不動のあまらしあまらんこやや正説をるべうむ竜田も靈山ちりきとあるあれが竜神を天柱國柱といへるも深秘のことろある

古語拾遺等ふのせげしむこやい未學の輩ひやへみ信用しかこころをうらな書の中あや一決せげることやわいもんや異書ふおきてい正とまべうらるるをわかくてあとの二神たひえらはるはの洲をうみたまふまづ淡路の洲をうみまは淡道穗狹別路の次ふ伊豫の二名の洲をうみまは一身ふ四面りり一を愛止比賣といふあまの伊與あり二を飯依比賣やいふこれら讚岐なり三を大宜都比賣やいふあれは阿波あり四を速依別やいふこよの土佐あり次は筑紫の洲をうみまは一身ふ四面りり一を白日別といふこれら筑紫あり後筑前筑後やいふ二は豊日別やいふあまの豊國あり後豊前豊後といふ三を

神代紀曰既而伊奘諾尊伊奘冊尊共議曰吾

不生天下之主者歟於是共生日神号大日靈貴此子光華明彩照徹於六合之内

晝日別といふこれ肥の國なり後肥前肥後やいふ四を豊久土比泥別といふこれ日向あり後日向大隅薩摩やいふ筑紫豊國肥國日向あどいへるも二神次小壹岐の洲をうみまんと天比登都柱といふ次小對馬の洲をうみまんと天の狭手依比賣といふ次小隱岐の洲をうみまんと天忍許呂別やいふ次小佐渡の洲をうみまんと建日別といふ次小大日本豊秋津洲をうみまんと天御虚空豊秋津根別といふまべくこれ大八洲やいふなりこの外あまの洲はうみたまふ後海山の神木のおや草のおやまつくこやいふくうみましては皇の御孫も神おませの生たまへる神の洲をも山をもはくりたまへるかたも洲山をうみたまふか神のあはれまじりる歟神世のまはれを誠におもひりたり二神よりらひく宜をく我をぐ大八洲國および山河草木たりり如何か天の下の君たるりのをうみまはくもやとく先日神をうみまんと御子光をうみまはく國の内みたりやある二神よりらびく天を送りて天上にたをはづけたまふこの時天地相去ることを遠く天の御柱をもはくあげたまふこれを大日靈尊と申は靈の字の靈と通むべきあり陰氣を靈といふやまの天照大神とも申は日神おまはるなり次は月神なりうみまんとその光を日おはかり天よの布せて夜の政をはづけたまふ次小蛭子をうみまんと三をせあるまぐ脚たぐ天磐楯樟船ふのせて風のみあくまれちまら次小素盞烏尊をうみまんと勇みたりく不忍申して父

まら次小素盞烏尊をうみまんと勇みたりく不忍申して父

母の御心ふくまを根の國よのねやめたまふこの三柱
 い男神あましまたふよつと一女三男と申れありまぶと
 あつゆる神みれ二神の所生ふましまはといへども國の
 主たるべしとてうみたまひしむをばはくふ此四神を
 申傳へたるふこそ其のち火の神軒俱突智をうみまし
 時陰神やがて神退たまひあを陽神うみいりて火成
 三段ふきるその三段おのく神やある血の志さくも
 そくひく神とありり經津主神今主の神とも申健甕槌神
 武雷武雷の神とも申の祖なり陽神猶志ひて黄泉までお
 今今の鹿島の神ありの誓りき陰神うみくこの國の
 人を一日ふ千頭ころまきべしやのたまひるまば陽神へ千
 五百頭を生だしと宣ひかりとて百姓をば天益人とも
 いふ死むるものよりもうまうくもはあきあり陽神あ
 たりたまひる日向の小門の橋の檉原やわかところあて
 御殺したまふこの時あまの神化生したまへり日月神
 とり生きたまふ伊奘諾尊神功まご終まふれば天上あ
 とり説あり伊奘諾尊神功まご終まふれば天上あ
 のあり天祖お報命と即ち天ふやぐまをたまひるとぞ
 或説又伊奘諾伊奘冊の梵語なり伊舎那天伊舎那后あり
 やをいふ地神第一代大日靈尊これを天照大神と申れ又
 日神とも皇祖とも申ありこの神のうまれたまふこと三
 の説あり一ふハ伊奘諾伊奘冊の尊はひもくくひて天下
 此あつとをうまはく人やとて先日神をうみ次又月神次
 小蛭子次小素盞鳥尊をうみたまふといるりまは伊奘諾
 尊ひごりの御手小白銅の鏡をやりて大日靈尊を化生し

母の御心ふくまを根の國よのねやめたまふこの三柱
 い男神あましまたふよつと一女三男と申れありまぶと
 あつゆる神みれ二神の所生ふましまはといへども國の
 主たるべしとてうみたまひしむをばはくふ此四神を
 申傳へたるふこそ其のち火の神軒俱突智をうみまし
 時陰神やがて神退たまひあを陽神うみいりて火成
 三段ふきるその三段おのく神やある血の志さくも
 そくひく神とありり經津主神今主の神とも申健甕槌神
 武雷武雷の神とも申の祖なり陽神猶志ひて黄泉までお
 今今の鹿島の神ありの誓りき陰神うみくこの國の
 人を一日ふ千頭ころまきべしやのたまひるまば陽神へ千
 五百頭を生だしと宣ひかりとて百姓をば天益人とも
 いふ死むるものよりもうまうくもはあきあり陽神あ
 たりたまひる日向の小門の橋の檉原やわかところあて
 御殺したまふこの時あまの神化生したまへり日月神
 とり生きたまふ伊奘諾尊神功まご終まふれば天上あ
 とり説あり伊奘諾尊神功まご終まふれば天上あ
 のあり天祖お報命と即ち天ふやぐまをたまひるとぞ
 或説又伊奘諾伊奘冊の梵語なり伊舎那天伊舎那后あり
 やをいふ地神第一代大日靈尊これを天照大神と申れ又
 日神とも皇祖とも申ありこの神のうまれたまふこと三
 の説あり一ふハ伊奘諾伊奘冊の尊はひもくくひて天下
 此あつとをうまはく人やとて先日神をうみ次又月神次
 小蛭子次小素盞鳥尊をうみたまふといるりまは伊奘諾
 尊ひごりの御手小白銅の鏡をやりて大日靈尊を化生し

右の御手ふとりて月讀尊を生し御首をめぐらしてか
 りみたまひひの間み素盞烏尊をくむせもいなりまの伊
 弉諾尊日向の小戸の川みて見そぎたまひひとき左の
 御眼をあひひく天照大神を生し右の御眼をあひひく月
 讀尊を生し御鼻をあひひく素盞烏尊を生したまふやも
 いふ日月神の御名も三つり化生のやまも三あねん凡
 慮をとりてたしまたおまもまたやまも一よも高天原
 をひひ二よの日の少宮といふ三ふの我日本國といふあり
 八咫の御鏡をせましくく我を見るごとくみせよ
 を救たまひひることを和光の御誓ひもあはれてこそ
 けふふふうき道あるべしとて三所ふ勝劣の義をい存だ
 だくらばるるはありてふ素盞烏尊父母二神ふあはて

きて根の國ふくだりたまはるる天上みまふくく
 尊み見之奉りてひごぶるよまかりあんや申たまひひと
 ばゆるはと宣ふふよりく天上みのかりまはる大うみと
 ろき山嶽なり响きこの神の性たなきが然らむるみあ
 む天照大神おどろごましくて兵の備へをしたまはた
 まふこの尊黒きことろあきよをこへたまふはくむ
 誓約をあひく清き黒きく知るべし誓約の御中み女
 をしませばまたあきことろなるべし男なうませばよ
 心なうませば素盞烏尊日神を奉られり八坂瓊の玉を
 やりたまひひくその玉お感し男神化生したまふ素
 盞烏尊よりくびくまやあれくちぬや宣ひるふより
 て御名を正哉吾勝々速日天忍穗耳尊と申拾遺の説

申皇正哉拾遺の説

たの説ふハ素盞鳥尊天照大神の御頸よりたまへる御
 紗の瓊玉をこひとりて天の真名井よりあまをまきぎこれ
 かみたまひし先吾勝尊うまれまへるその後猶四を
 らの男神うまれたまふ物たねハ我々のあまは我子あり
 せて天照大神の御子にあはたまふをいなり これハ日本
 紀の一説也
 この吾勝尊をハ大神めぐりておがく常ニ御脇もと
 おまえたまひしかば脇子といふ今の世におはあま子成
 りけり子といふハ僻言なりかくて素盞鳥尊猶天上おま
 けりけるがはまぐの科を犯したまひき天照大神いへ
 て天の石窟よりたまたま國の内とこやみか降りて昼
 夜のたままへたりきまろくの神たち愁へあがきた
 まふその時諸神の上首めて高皇産靈尊といふ神まりく

きむらう天御中主の尊三けりらの御子おまへる長を
 高皇産靈を申次をハ神皇産靈次を津速産靈といふと
 見えし陰陽二神こそけりて諸神成生りたまひし
 直ハ天御中主の御子といふ事おがつらる この三神を
 天御中主の
 御子といふこと日本紀ハこの神天のやほりとの違り
 見え古語拾遺み出たり あまの
 みく八百萬の神を集へて相議りてまふその御子と思
 兼といふ神の神もろより石凝姥といふ神を ひの
 神の御形の鏡を鑄せむそのたまひたりたまへる鏡諸神
 のこころみあをば これハ日本紀伊國日
 前の神也 次ハ鑄たまへる鏡
 るけり これハ日本紀伊國日
 前の神也 諸神よりあまありたまたま初
 ハ皇居みまりくさいま伊勢 あまのたま
 五十鈴の宮みいつくれ給是也 あまのたま
 八坂瓊の玉を あまのたま 天の日鷲の神を あまのたま 青幣白幣

をはくくくく手置帆負彦狭知の二神をして大峽小峽の
 材を切く瑞の殿をほくらしむこの外くさぐさあその物ま
 ぐふ備子くく天香山の五百箇の真賢木を根くくみ
 く上枝み八坂瓊の玉をとりうけ中枝み八咫の鏡を
 取うけ下枝み青和幣白和幣をとりうけ天の太玉命高
産霊の神をく捧げ持らしむ天兒屋命津速産霊の子或
の子ありの孫とる祈禱らしむ天鈿女命真碎の葛をうげくく
いへり蘿葛を手織みく竹の葉鮫鮎木の葉を手草みく著鐸
ひらけのうらの牙を持し石窟の前うけて俳優をしと相ともみ歌ひま
ふま庭燎をあきくく常世の長鳴鳥を集へくた
くひふ長鳴せしむこれねみみ神天照大神聞しめく我
の起りこの頃石窟みく居し豊葦原の中津國のやとやみ

をくくくく天鈿目命かくくくささるややあがく御
 手を以て細目みく見たまふこの時み天手力雄命と
 いふ神思慮の子磐戸の脇み立たまひくくその戸をひきあ
 けく新殿みく住したまつる中臣の神天兒屋忌部の神
命あり天太玉志重くめまを日本紀うら端出の繩と書り註よ
ふい日の御繩と書引めぐらしてお歸りましと申上る
是日影の象といふ天をくめく晴くくくくくくあひ見あま面みれ明らる
み白く手をのべくうたひまひくくあをれ天のあま
おもくく古語ふ甚切あるをあれといふおもしろくあれ
たのあまはやく竹の葉をけ木の名ありその葉をふ
へる手かくて罪を素盞烏の尊みよせくおちるみ千座
の置戸を以て首の髪手足み爪をぬきて贖くくめその罪

をもちひく神逐ひふやうをれきこの高天原よをくだり
 て出雲の簸の川上やのふところふいたりたまふその所
 よひやりの翁と姪を有り一の少女をさそくこのまをてつ
 流泣りの素盞鳥尊たそを問たまふ我のこま國神あり脚
 摩乳手摩乳といふこの少女はこが子あり奇稻田姫とい
 ふ先お八箇の少女あり年こやふ八岐の大蛇のたえおの
 まれま今このをとめまこのまねおむさまで申はこが尊
 我ふくれんやや宣ふ救のまふ奉ると申はれはこを
 やをを湯津はま櫛おやりねみはうふは八醞の酒
 を八の槽ふもりてまちたまふとてかの大蛇来たま
 玉頭おのく一槽ふ入る吞醉くねありなるを尊をらせ
 る十握の劔をぬきて寸々お切つ尾おのりく劔の刃を

こけりけぬ割く見たまへば一の劔ありそのいへおはね
 ふ雲氣有りなれむ天のむく雲の劔と名はく
日本武尊お
りこめく草薙の劔といふ
それより熱田の社よまへ
あま奇しきはるがざあり我何ぞ
 あくくくくくくくおおけんやや宣ひく天照大神お奉る
 上らねるなり其のち出雲乃清地ふいたり宮をたて稲
 田姫と住たまふ大己貴神大汝とを生しめく素盞鳥尊ハ
 はおお根の國お就まぬ大汝神この國よとこまりて今
 出雲の大天下を經營し葦原の地を領したまひたり依く
 神おまへ
 これを大國主の神やも大物主とも申はるその幸魂奇魂を
 大倭の三輪の神おまへ
 第二代正哉吾勝々速日大忍穗耳尊高皇產靈尊の女栲幡
 千々姫命おあひく饒速日尊瓊々杵尊を生しめく吾勝尊

葦原の中洲より下りたまへば御子にまられたまひ
 うらむを下げたりと申たまひく天上より留りたまへ
 鏡速日尊を下りたまひ時外祖高皇產靈尊十種の瑞寶
 を授けたまへ瀛津鏡一邊津鏡一八握劍一生玉一死反玉
 一足玉一道反玉一蛇比禮一蜂比禮一品物比禮一これ也
 この尊をやく神さかたたまひふり九國の主とすいづ
 したまをばけりしや吾勝尊下りたまへばけりしや
 天照大神三種の神器を傳へたまへ後みまも瓊々杵尊よ
 り授けま〜小鏡速日尊のたねを得たまへ然るに日
 嗣の神みま〜たまぬなるべし
此事舊事本紀の説なり
日本書紀よへ見えぬ
 天照大神吾勝尊は天上より降りたまへば地神の第一
 一ふらごへ奉るそのけりめ天下の主たるべしとて生

たひひ〜ゆへふや
 第三代天津彦々火瓊々杵尊天孫とも皇孫とも申は皇祖
 天照大神高皇產靈尊はたまゆみ〜葦原の中
 洲の主とありてあま〜たたまをんをばあふその國
 邪神あね〜たやま〜たりたまふらとか〜たりたねは
 天稚彦やの神をくだりて見せしめ給ひ〜大汝の神
あね〜たやま〜たりたまふらとか〜たりたねは
 の女下照姫よやら〜たりと申さる三とせみたり
 ぬよりて名あり雉をばら〜て見せられ〜を天稚彦射
 殺し〜その矢天上より降りて大神の御ま〜血ふ
 めれたりた〜怪〜たたまひ〜投下され〜天稚彦新
あね〜たやま〜たりたまふらとか〜たりたねは
 嘗〜ふせり〜胸ふあ〜死にぬ世返〜矢を忌
 いこのゆゑたりけ〜よ〜はるべき神をえ〜

神皇正統記

卷之十一

十一

時經津主命（神代卷の神）武甕槌神（鹿島之神）救をうけんと下

まなく其上（え）居（わ）大汝（おほなむす）の神又大神（おほな）の救（すけ）を告（つげ）む其

子八重事代主神（鴨今之葛木の）相（あ）やもみま（こ）ひ申（ま）ぬ次

の子健御名方乃美神（今之諏訪の）を諏訪（すま）の湖（うみ）追（お）て攻（せ）られしを

てもろくくの悪神（あくがみ）を罪（つみ）き人仕（ひと）へるをば

のありてうなりしを申（ま）たまふ大物主（おほなむす）の神大汝（おほな）の神

申（ま）てうくれたけふと見（み）ゆ此大物主（おほなむす）の神事代主（ことしろ）の神

相（あ）やもみ八十萬（やそまん）の神を引（ひ）卒（す）て天（あめ）みま（こ）づ大神（おほな）とみ

めたまひま（こ）ろく八十萬（やそまん）の神を領（りやう）し皇孫（すめみま）をま

まろくくをばけうなりしをたたまひたりその後天照大

神高皇産靈尊（たかみかむす）ひまらして皇孫（すめみま）をくたまふ八百萬

の神救（すけ）を承（う）り御共（みとも）はたけりし諸神（しよがみ）の上首（うへしゆ）三十二

神ありその中（うち）五部（いつぶ）の神といふ天兒屋命（あめのこゝろのみこと）中臣（なかつひ）天太玉

命（のみこと）天鈿女命（あめのつひめのみこと）石凝姥命（いしのねいばなのみこと）玉屋命（たまやのみこと）

中（な）か中臣忌部（なかつひいぶ）の二神（ふたがみ）の神救（すけ）をうけし皇孫（すめみま）を

たまけまらりたまふ三種（みつゑ）の神寶（かみたま）をけけし

まぐあしめ皇孫（すめみま）を救（すけ）しと宣（のたま）し葦原（あしはら）の千五百秋（ちひひやくあき）の

瑞穂（みづほ）の國（くに）我子孫（われこゝろ）可王（かおう）之地（のち）也（なり）宜尔皇孫（よろしくすめみま）就而治馬行矣寶

祚（あま）之隆（たか）當與（あた）天壤（あまのつち）無窮（むきゆう）者矣（なり）又大神御手（おほなみかて）寶鏡（たからがみ）をうけたま

ひ皇孫（すめみま）ははづりて吾兒（われこゝろ）視此寶鏡（みたまがみ）當猶（あた）視我（みたまがみ）可與（か）同

床共（とこども）殿（のみ）以（も）為（な）齋鏡（いはいがみ）のたまふ八坂瓊（やさか）の曲玉（まがたま）天（あめ）の藪雲（やぶぐも）の劔（つるぎ）

を加（く）へ三種（みつゑ）をたまふの鏡（かみ）のこくみ分明（あきら）なるを

ちく天下を照臨したまへ八坂瓊のひろがねるがごとく
 曲妙まがたをもちく天下をまろしめせ神剣をひきはやく順が
 をばるるはをたのげたまへるを救すくまりくくらのとぞ此
 國の神寶かみもく皇統すめみま一種いっしゆなりくくしんあやまこととみ
 是らの教を見えたり三種の神器しんぎ世に傳ふこと日月星の
 天あめもあるふおれど鏡かがみの日の体あり玉の月の精たまなり劍つるぎの
 星ほしの氣きをまあるまきまうひあるなきまやもくかの寶
 鏡かがみのひきふまろしをなる石凝姥命いしぎらひのみことの作つくりたまなりけり八
 咫やちの御鏡みかがみ傳つたあり玉を八坂瓊の曲玉玉屋命たみやくの作つく
 りたまへるなり八坂やちも口傳くちづたあり劍つるぎの素盞高尊すさの高尊の得たまひく大
 神かみも奉られ兼雲かみの劍つるぎなりこの三種さんしゆもひきたる神教かみの
 まはく國くにを手持たもちすべき道みちなるべし鏡かがみの一物をたく

まへに私のことろをくくく萬象まんじやうを照てるは是非善惡ぜいぜんあくのま
 こくはくそれごとくいふこととせしそのまがたよきことひ
 て感應くわんごうするを徳とくとれこれ正直あんぜんの本源ほんげんなり玉の柔和善順わうじぜんじゆん
 を徳とくとれ慈悲じひの本源ほんげんあり劍つるぎの剛利決斷かうりけつだんを徳とくとれ智慧ちゐの
 本源ほんげんなりこの三徳さんとくを翕受あひせうして天下てんかのをひきまへんこ
 ろまこととみられたるべし神教かみあきくうふし詞ことばはくま
 やりよむねひろしあまらさへ神器かみもあはれたまへり
 いやうたしなれきこととみや中なかつも鏡かがみを本もとと宗廟そうみやうの正
 躰たいとけふられたまふ鏡かがみの明あきをうとちとせり心性しんじやうあき
 うをれば慈悲決斷じひけつだんはその中なかつもありまことまはく御影みかげを
 うけたまひくうをあらき御みとるをく先まへたまひけ
 むぞう天あめもある物日月にちげつよをあきくうあるはちより

て文字を制するも日月を明とまやのたり我神大日の
寶たからよきませら明德めいとくをも依て照臨せうりんしたまふらや陰陽いんやうふ
おきくけりたりたゞ一冥頭みやうだうおほきくたのみたり君も臣も
神明の光胤こういんをうけあるひいまはしく教しよをうけり神達かみたちの
田齋いなさいありたきうこねをあかぎ奉らされべきこの理ことわりをさ
やうその道ふたがけはむ内外典ないがいてんの學問がくもんもこゝよきけま
るべきふこそ道のひろまるべきことや内外典ないがいてん流布りゅうふのち
うゝありといひはなれ魚いさなをうるこゝろ網あみの一目ひとめふする
なれど衆目しゆめのちうゝなれぬべことを得ることうごまか
ごま一應神おうじん天皇の御代みよより儒書じゆしよをひろめり聖徳太子
の御時みよときより釋教しやくきやうをはりまふりたまひりこれみお權化けんげの
神聖かみせいおましませば天照大神の御みよこゝろをうけりこゝろ國

の道をひらめあらくれたまふなるべかくてこの瓊しやう々
杵尊きみみこと天降あめくだりましく狭田彦さたひこといふ神かみまゐるをあひまこんち
神かみおてまかぐやまきく目をあをひる神かみをうりり天鈿女あめのつねめ
神かみゆきつひぬ皇孫すうそんいづくありいこまきまんだまきと問と
しつ筑紫つくしの日向ひなたの高千穂たかちほの穗觸ほふの峯かみふましま及および
それ伊勢路いせぢ五十鈴いすずの河上かみふいたるをいと申まをかか神
の申まをのまふ穂觸ほふの峯かみふあまくだりりあつたりたま
ふべきやこゝろをいとめらけり事勝國勝ことかつくにかつといふ神かみこれ
矣諾尊いなるのみことまわりてこが居いたる吾田あごの長狭ながさの御崎みさきふんよる
しかるべいと申まをちびたれはそのやこゝろふまませたま
ひたりあてよ山の神かみ大山おほやま祇しの二ふたの女むすめあり姉あねを磐長姫いそながひめと
いふいふの神かみあり磐石いわいし妹いもうとを木花このはな閑耶かんや姫ひめをいふいふの神かみあり花木はな二人

をめで見たまふ姉のかこち見みくうをくねばうなすは
 妹を留めたまひしは磐長姫うらみいつりて我をいぬ
 まうらば世の人の命あがくて磐石のどくあまき一
 妹をめでたきば生らん子の木の花乃おとくお散落あ
 るを誼ひくろふよりて人の命みどろくなれりて木花開
 耶姫めされく一夜おともみぬ天孫あやめたまひなれ
 ば腹たちく無戸室をほくり籠り居くみばうら火はあ
 ちし三人の御子うまきたまふ所のものをけりたる時
 うみまを火闌降命といふ火のほろあたりしお生ま
 を火明命といふのちお生まぬ火々出見尊と申はこの
 三人の御子をば火もやぶ母の神もそあををれたま
 ぶ父の神よりおびまきくたりこの尊天下を治めたま

ふあを三十萬八千五百三十三年といを全ことよりけま
 天上おとくまをまぬ神達の御事八年序をよりかこたふ
 や天地よりねくを以來ろくを樂年成經たりといふ事
 見えたる文をくそく天竺の説又人壽無量ありしが
 八萬四千歳又ありそれよを百年ふ一年成減して百二十
 歳の時ちひひ百釋迦佛いづたまふをいなるこの佛の
 出世ハ鷓鴣草葍不合尊の未はまのころなまきば
 佛滅の後二百九十年よりより百年又一年をまてこと
 をけるうらこの瓊々杵尊のまけはがさハ迦葉といふ
 佛のいづたまひなるをまふやりよりをくらん人壽二萬
 歳乃時この佛ハ出たまひたりと我
 第四代彦火々出見尊と申は御兄火闌降命海の幸まらあ

あきもあへは御子うまれたまふよるも鷓鴣草葍不合
 尊と申はまゝ産屋をいぶやそのいふこともうの羽をふき
 くのゆゑなりとあんなさくも産のとき見たまふあたらざ
 り申し、をのぞき見まゝなれを竜みあやぬ耻しきみ
 てされし耻みせたまはるの海陸をいへ相通しなご
 法らあとなりまゝあやて御子をまておきく海中へか
 たりぬのちみ御子のきくくくまゝあやをまて
 て何れみあがをく妹玉依姫を奉りて申しあひまら
 せんのやをそののみを天下を治れたまふとを六十三萬
 七千八百九十三年といたり震且の世をいへるあ
 萬物混然としてあひまをいへるあを混沌をいふその後
 輕清物の天をあり重濁物の地とあり中和の氣の人とな

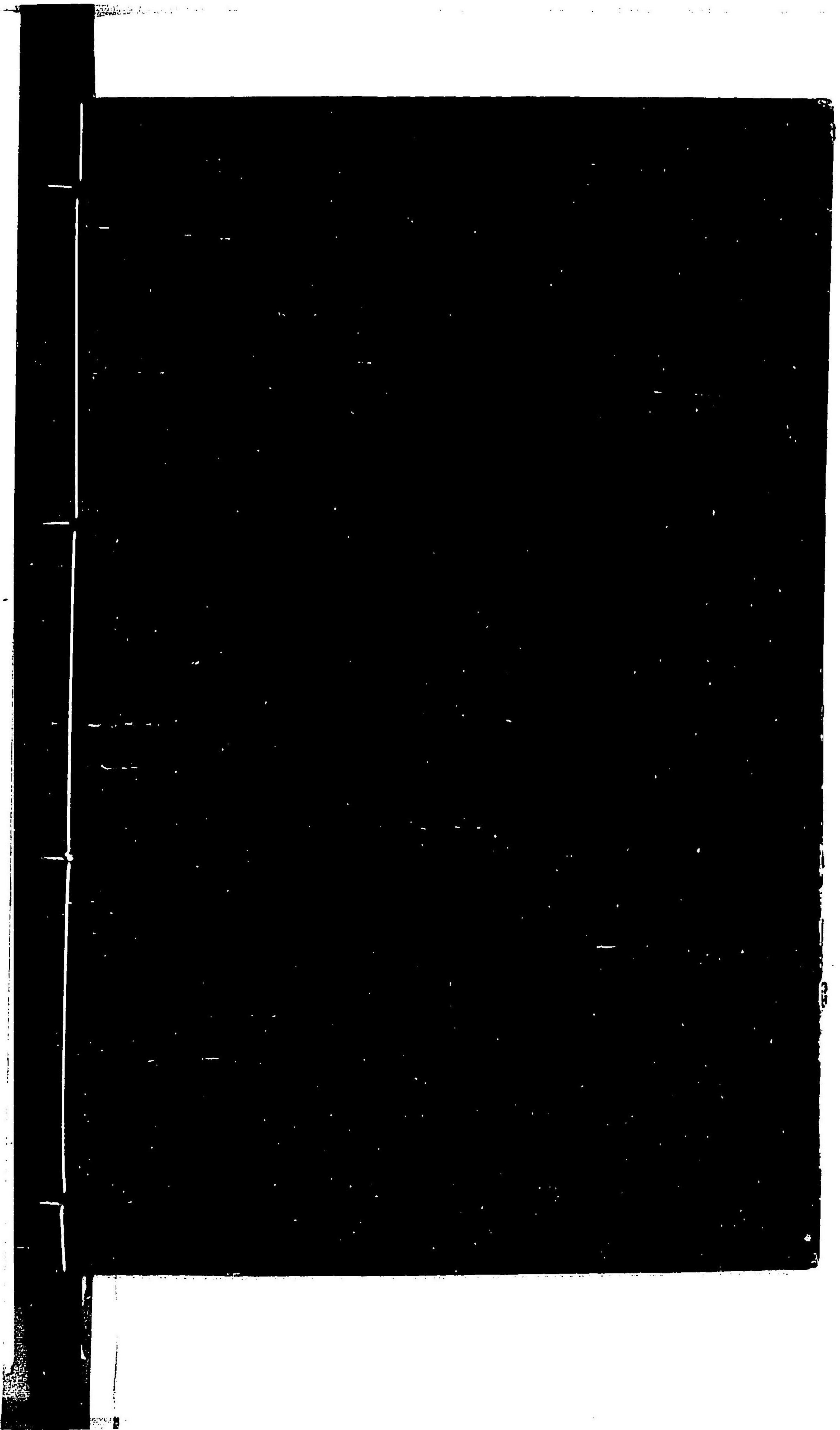
るこれに三才をいふこれまての我國をいへるそのは
 じめの君盤古氏天下を治ることを一萬八千年天皇地皇人
 皇あどいふ王あひ續のく九十一代一百八萬二千七百六
 十年はまよあをいへる百十萬七千六十年といへる一説あ
 ららあまゝあをいへる盤古のけじめのこの尊の御世の末は
 たああをいへる盤古のや
 第五代彦波瀲武鸕鷀草葍不合尊と申は御母豊玉姫と名
 ばけ申はる御名あり御姨玉依姫と申はて四つらの
 御子うまれたまふ彦五瀬命稻飯命三毛入野命神日本
 磐余彦尊と申は磐余彦尊を太子おたてて天日嗣をあら
 續しめまゝくくあをいへるの神の御代七十萬余年のあどあ
 やらあをいへるの三皇のあどめ伏犧といふ王あり次み神農

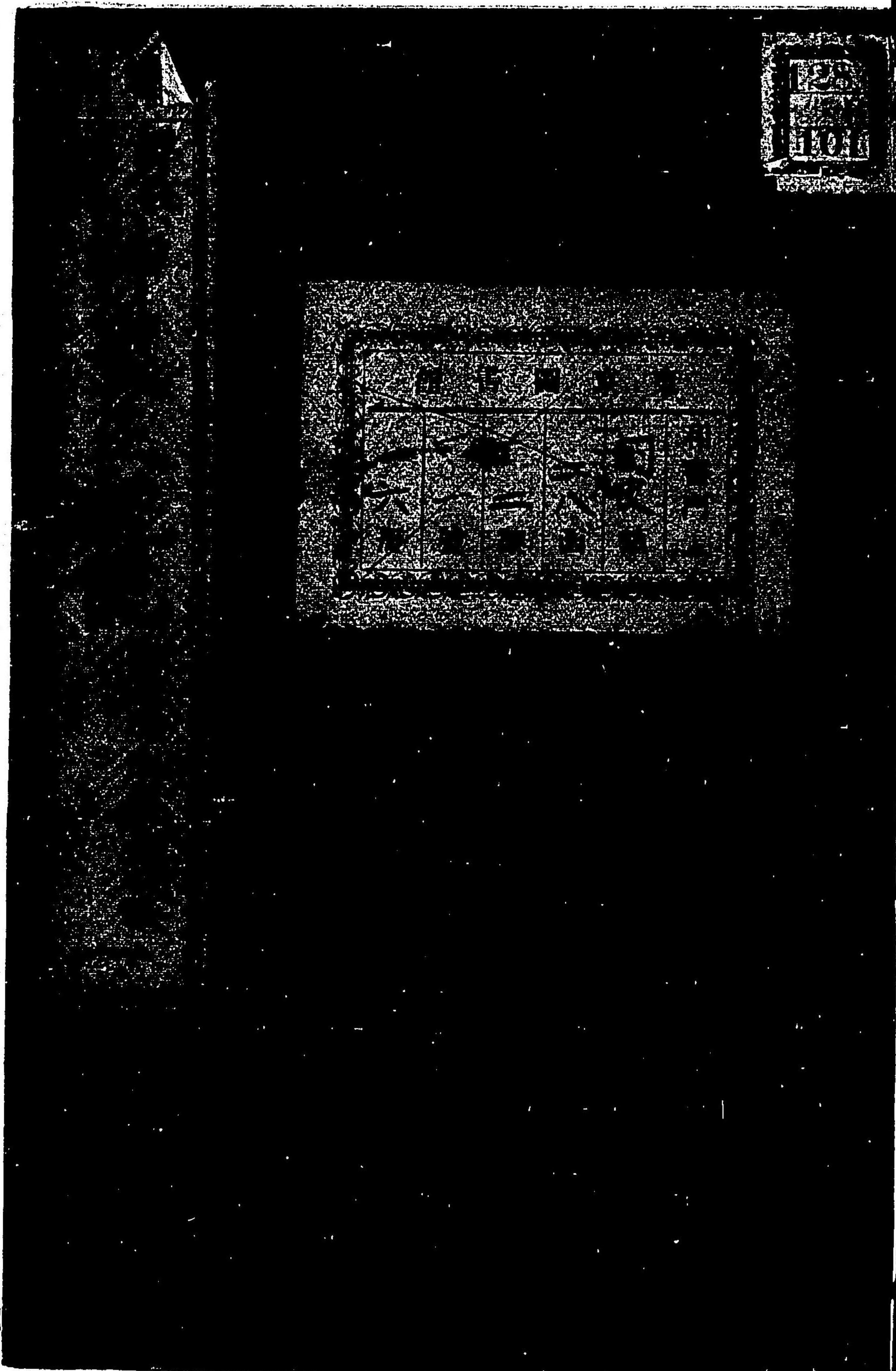
神代紀曰救皇
孫曰葦原千五
百秋之瑞穗國
是吾子孫可王
之地也宜爾皇
孫就而治焉行
宝祚之隆當與
天地無窮者矣

みきば百やいり百官百姓をどのいふみく知るべきあり
むろゝ皇祖天照大神天孫尊みことのりせし寶祚を隆
當與天壤無窮とあり天地もむろゝふろゝるべ日月も光
をあらためばいそんや三種の神器世に現在したまはり
窮らるべうららばるの我國を傳ふる寶祚也あまきくたふ
やみ奉るべき日嗣をうけたまふ皇ふあんおなごま

評註校訂神皇正統記卷之一畢

128
6
101





000697-001-6

128-101

神皇正統記

芳賀 矢一/校

M16

ACB-1548

